

「寒山拾得」考

—豊干像を中心に—

岡本文子

—

森鷗外「寒山拾得」は、大正五年一月、雑誌「新小説」に発表された。この時期が鷗外にとって、軍医総監陸軍省医務局長としての官職を辞そうとする時期と一致するところから、この作品は早くから鷗外固有の退官問題と掘めて、官僚批判という粹組のなかで捉えられてきた傾向にある。

早くは唐木順三が、作中の寒山拾得による閻丘胤への批判のなかに、官吏を辞そうとする鷗外自身の問題を読みとり、そこに〈役人に対する反感〉や辞任への〈未練〉をみた^①。

また、岡崎義恵も、〈殆ど鷗外の全生涯を繫縛した官僚・軍閥の世界に対する訣別の辞〉だとし、吉野俊彦もこれを受けて、〈三十五年の長きにわたって多くの哀歎を味わってきた陸軍軍

医というサラリーマン社会から身を引く直前の作品であるが故に、その官僚批判はこれまでになくきびし^③いとされた。

一方、小泉浩一郎は、退官時の不平の存在という見方とは逆に、〈軍医総監陸軍省医務局長としての鷗外の肩書への未練に対する訣別と自己克服のモチーフ〉を見ようとした^④。

いずれにせよこれらの論が、主題解釈と鷗外固有の問題とを不可分のかたちで論じているのに対して、古田島洋介は、作品内部の詳細な分析により、主人公閻丘胤のありようを、〈何ら官吏としての本分を損うものではない〉とし、〈官僚批判であれば、閻の失政・悪政を以てすべきである。〉として、官僚批判、もしくは官僚気質への批判という従来の読みを斥けた^⑤。

ところで、主人公閻丘胤への批判——それを〈盲目の尊敬〉を抱くものへの批判として捉えるにせよ、あるいは官僚批判に

つながるものとして捉えるにせよ——、その核となるのは、言までもなく、寒山拾得の嘲笑をうける小説末尾の解釈にかかるわけであるが、不思議なことには、この嘲笑を浴びる存在が、閻丘胤一人にとどまるものではない筈であるのに、この点に関する言及が従来欠けているのである。

特に〈豊干がしゃべったな〉という、寒山逃げしなの言葉をどのように解すべきであろうか。

小説末尾において、寒山拾得は仰々しい名告りをあげた閻に対して、哄笑して去るのだが、その際にこの一言をつけ加えることを忘れなかった。この一言は文字通りに解釈すれば、豊干への不快感を示す以外の何ものでもあるまい。豊干も、寒山拾得の批判の対象となり得るならば、閻丘胤を軸にした今までの解釈にも、いささかの修正が必要になるであろう。

そもそも天台国清寺の伝説に、三隠として寒山拾得と並び顕彰されてきた豊干であつてみれば、暗黙のうちに作品理解においても、豊干を悟達の人の側に擬せられて自明のこととされてきたきらいがあつたのかも知れない。

とまれ、主人公閻丘胤を軸に展開されてきた官僚批判、ないしは鷗外の〈心境小説〉(小泉浩一郎⁶⁾)的な読みからいったん自由になって、豊干への視点をとり込みながら、作品末尾、神仙哄笑の意味をあらためて問い直してみたいと思うのである。

二

ところで、小説「寒山拾得」に原拠のあることは既によく知られている。

この小説と対となす「寒山拾得縁起」(大正五年一月、雑誌「心の花」掲載)には、〈いつもと違って、一冊の参考書をも見ずに書いたのである〉と鷗外はことわっているのだが、その真偽のほどはともかく、この小説の基となったものが、九世紀ないし十世紀、唐の末又は五代の頃、閻丘胤によって記された「寒山詩集序」であることは周知の通りである。

また近年では、古田島洋介によって、江戸時代の「寒山詩集」注釈書である「寒山詩闡提記聞」に直接負うていることが実証されている⁷⁾。

そこで、鷗外の小説の登場人物たちが、原拠と比べ、どのように創造されているのか勘案しながら、当初の問題である、寒山拾得の哄笑の及ぶ範囲について考えることにする。

はじめに、小説「寒山拾得」の末尾について確認しておきたい。

〈日本の府縣知事位〉の官職を得た閻丘胤(小説では姓は閻、名を丘胤としているが、原拠によると姓は閻丘、名は胤となっている。本稿では、小説と原拠とをそれぞれの呼称に従って記

し分けることにする。) という官吏が、任地である台州の国清寺において、かねて乞食僧豊干より聞き及んでいた、文殊菩薩の生まれかわりである寒山と、普賢菩薩の生まれかわりである拾得に「いよいよ見えることになった件を左に引用する。(底本は岩波書店版「森鷗外全集」による。)

一人は髪の二三寸伸びた頭を剃き出して、足には草履を穿いてゐる。今一人は木の皮で編んだ帽を被つて、足には木履を穿いてゐる。どちらも痩せて身すほらしい小男で豊干のやうな大男ではない。

道翹が呼び掛けた時、頭を剃き出した方は振り向いてやりと笑つたが、返事はしなかつた。これが拾得だと見える。帽を被つた方は身動きもしない。これが寒山なのであろう。閻はかう見當を附けて二人の傍へ進み寄つた。そして袖を掻き合せて恭しく禮をして、「朝儀太夫、使持節、台州の主簿、上柱國、賜緋魚袋、閻丘胤と申すものでございませう」と名告つた。

二人は同時に閻を一目見た。それから二人で顔を見合せて腹の底から籠み上げて来るやうな笑聲を出したかと思ふと、一しよに立ち上がつて、厨を駆け出して逃げた。逃げしなに寒山が「豊干がしゃべつたな」と云つたのが聞えた。

驚いて跡を見送つてゐる閻が周囲には、飯や茶や汁を盛つてゐた僧等が、ぞろぞろと来てたかつた。道翹は眞蒼な顔をして立ち竦んでゐた。

見栄えのしない寒山拾得による突然の哄笑は、閻にとつても、閻を案内した寺僧道翹にとつても、まさに青天の霹靂の出来事であつたに違いない。虚をつかれ、あつげにとられている閻と、青ざめて立ちつくす道翹の姿が印象的な幕切れである。

この、鷗外の小説末尾に対応する原拠は次の如くである。

(底本は「寒山詩闡提記聞」上中下三卷 白隠禪師注釈)

遂_三至厨中、竈前見二人向火大笑。胤便禮拜。二人連聲喝胤、自相把手、呵呵大笑、叫喚乃云、豊干饒舌。饒舌。彌陀不識、禮我何爲。僧徒奔集、遞相驚訛、何故尊官禮_三貧士。時二人乃把手走出寺。

(上卷「三隱詩集閻提記聞」)

因に白隠禪師の訓点に従つた訓読文を掲げておく。

(遂に厨中に至れば、竈前に二人、向火大笑するを見る。胤、便ち礼拝す。二人、連声に胤を喝し、自ら手を相い把つて、呵呵大笑、叫喚して、乃ち言う、豊干饒舌、饒舌。

彌陀を識らずして、我を礼して何か為さん。僧徒奔り集り、
通いに相驚き訝る。何故に尊官、二貧士を礼する、と。時
に二人乃ち手を把て走り寺を出づ。

小説末尾に關しての、右の原拠との異同を挙げておくと、先
ず、原拠では、閻丘が寒山拾得に対して〈禮拜〉しただけで、
〈可々大笑〉されるのに対して、小説の方は、〈朝儀大夫云々
……〉と長々しい官名を名告りあげ、その俗物性が付加されて
いて、官僚批判を呼ぶ最大の根拠となつてゐるところである。

また、原拠に印象的な〈豊干饒舌饒舌〉という言葉をも、鷗外
も〈豊干がしやべつたな〉とやや伝法な言葉に置きかえて踏襲
している。但し、原拠の方はこの後に続いて〈彌陀不識禮我
何爲〉とあり閻丘を戒めるのであるが、小説ではこの宗教色が
拭われている。そして逆に、小説では原拠にはない道翹の青ざ
めて佇立する姿を写して、ここで小説は閉じられることになる。
一方、原拠の方は、このあと閻丘胤が寒山拾得の詩を集め、
詩集編纂に至る縁起が記されている。

鷗外が割愛した原拠の後日譚というのは、その後、一喝にも
めげず隠士を追う閻丘と、ひたすら石窟にこもり再び姿を見せ
ることのなかつた寒山拾得との対照が描かれるところである。

このように、小説は原拠に比して、後半の説話を捨象し、神

仙の哄笑を以つて暗転する劇的效果のある終結部を用意したと
いえよう。

かつて三島由紀夫が、〈深い暗示的手法によつて、終結部で
超人間的な世界を急激に読者の目前にひろげ、その世界を垣間
見たと思ふときに、小説は終わつてしまふ。……そしてこちら
側には、永遠に嘲笑された人間が残つてゐる。〉と絶賛した所
以である。

不測の事態にたち至り、呆然自失する者、ひたすら青ざめる
者、饒舌と名指しされた今は不在の者、彼らのありようと、神
仙哄笑との因果を辿らなければならない。

三

まず、鷗外の案出した閻丘胤とはいかなる人物か。〈高級官
吏の愚昧さと尊大さ〉(景山直治^⑧)を備えた人物という定見に
誤りはないだろうか。

そもそも、小説冒頭にて、〈台州の主簿〉と伝えられる閻の
官位を〈日本の府縣知事位の官吏である。〉(傍点筆者)と説明
する鷗外の口吻のうちに、既に主人公を高級官吏として見なし
ているとはいふ難いニュアンスが窺われるのだが、それはとも
かくとして、小説末尾の名告りの場は、たしかに虚栄心に満ち
た官吏の愚昧さを示すものではあろう。あるいは、〈長安で北

支那の土埃を被つて、濁つた水を飲んでゐた男が、新任地へ来て大勢の下役の謁見を受け、〈地方長官の威勢の大きいことを味つて、意氣揚々としてゐる〉ところなぞも、そのような理解が成りたつところであろう。

ところで、小説において鷗外は、人間を三つのタイプに分けた人物論を述べている。それによると、〈道とか宗教とか云ふものに對する態度〉として、第一に、〈道と云ふものを顧みない〉〈無頓著〉な人間、いわば生活者とも言うべき存在を挙げ、第二に、〈専念に道を求めて、萬事を抛〉ち、〈日々の務は怠らずに、斷えず道に志〉す、いわば求道者という存在を挙げ、第三に、道に對し〈全く無頓著だと云ふわけでもなく、さればと云つて自ら進んで道を求めるでもなく〉、自分にとつて會得することの出來ぬものを尊敬し、〈盲目の尊敬〉を捧げる〈中間人物〉という存在を挙げている。主人公閻丘胤はこのうちの、第三のタイプを代弁する人物であり、エピソードの多くは実は官吏としての愚劣さを示すというよりも、この〈中間人物〉の屬性を示すことの方に費やされているのである。

たとえば次に引く例は、閻の官吏としての尊大さを示すように見えて実はそうではなく、第三のタイプの人間の陥りやすい盲信の徒としての滑稽さを示すエピソードとして理解されるのである。

閻は衣服を改め輿に乗つて、台州の官舎を出た。……路で出合ふ老幼は、皆輿を避けて跪く。輿の中では閻がひどく好い心持になつてゐる。牧民の職に於て賢者を禮すると云ふのが、手柄のやうに思はれて、閻に満足を與へるのである。

国清寺へ向かう途上の輿の内外の光景であるが、注意したいのは、閻が〈ひどく好い心持になつてゐる〉のは、輿の外の老幼が跪いているからなのではなく、国清寺で自分がこれから行かうであろう賢者への儀礼の様子を想像して一人で悦に入っているからなのである。

ここにあるのは、牧民に對して反りかえる尊大な官吏の姿ではなく、僧豊干にふきこまれて〈賢者を禮する〉という幻想にとりつかれた能天気で滑稽な一人の男の姿があるばかりなのである。

閻は〈平生から少し神經質〉な男であつたとある。だから彼はむしろ小心で氣のよい小人物であるのだ。こうした人間はえてしてその生き方において全く〈無頓著〉に過ごすこともできず、さればとて専念に精進する愚直な生き方に就くこともできないのである。結局ひとたび思い込んでとびついたものをやみ

くもに盲信するばかりで、判断力の備わらない人物、閻丘胤とは、そういう半可通人間のカリカチュアライズされた姿であるのだ。

元來閻は科擧に應ずるために、經書を讀んで、五言の詩を作ることを習つたばかりで、佛典を讀んだこともなく、老子を研究したこともない。しかし僧侶や道士と云ふものに對しては、何故と云ふこともなく尊敬の念を持つてゐる。自分の會得せぬものに對する、盲目の尊敬とでも云はうか。そこで坊主と聞いて逢はうと云つたのである。

受験秀才が真に主体的視野を獲得し得ないのは、いつの世にも普遍なのであろうか。定見というものを持たぬ閻は、こうして易々と他者を受け入れてゆく。

赴任を前にして頭痛に悩んでいた閻は、呪いにより頭痛を散じてくれた(実は「坊主の水に氣を取られて《頭痛を》取り逃がしてしまつた」とあるのだから、治してもらつたのではなく治つたのである。)と信ずる行脚僧豊干から、文殊と普賢の生まれかわりである寒山と拾得のことを聞き及び、天台國清寺はまさに我任地にあり、あとは会いにゆくまでとばかり、着任三日後に出かけて行つたわけである。

閻は豊干に向つて、「逢ひに往つて爲めになるやうな、えらい人はをられませんかな。」と問うている。「えらい」も「爲めになる」も安易に問うべきことではなく、また答えられることでもない。それを臆面もなく人に聞きたがる閻は、やはり輕佻浮薄の徒としての誇りを免れまい。

このように閻は人格において劣等ではあるが、しかしなお、官僚としての愚昧さを列挙することは難しい。

だから、國清寺にて寒山拾得に嗤いとばされたのは、閻の官僚としてのありようや、官僚體質そのものについてではなく、官名を麗々しく名告るその虚色の裏にはりついている、彼の安易で淺薄な生き方そのものが見抜かれたからなのである。

かくして小説は閻の揶揄にとどまるのであり、ここに官僚批判を主題として読むことは難しいと言わなければならない。

四

それでは、小説末尾、寒山拾得の嘲笑の場に居合わせたもう一人の人物、道翹についてみることにする。

新任の地方長官、閻丘胤の求めに応じて、天台國清寺を案内して回つたのが僧道翹である。

僧位の記述は無いが、事情からみるに、いわば寺の責任者の立場にあつたと思われる。その彼が、日頃寺の雜役に使つてい

る拾得や、残飯を求めてやってくる寒山が、大切な客を前にして突然の高笑いと共に遁走したのだから、〈眞蒼な顔をして立ち竦むのも無理はない。〉

この道翹という僧は、原拠にも、寺を訪ねた閭丘胤に対して、接待したり豊干の消息を語ったりする僧として登場しており、鷗外もほぼその役まわりを小説に反映させている。

但し、小説の道翹は原拠と異り、寺の厨に出入りする〈痩せて身すばらしい小男〉たちを露骨に見下す役割りを引きうけている。

以下の引用部分、道翹と閭の会話のやりとりとそのことが窺われる。

「拾得さんはいつ頃から當寺にをられますか。」

「もう餘程久しい事でございます。あれは豊干さんが松林の中から拾つて歸られた捨子でございます。」

「はあ。そして當寺では何をしてをられますか。」

「拾はれて參つてから三年程立ちました時、食堂で上座の像に香を上げたり、燈明を上げたり、其外供へものをさせたりいたしましたさうでございます。そのうち或る日上座の像に食事を供へて置いて、自分が向き合つて一しよに食べてゐるのを見つけられましたさうでございます。賓頭盧

尊者の像がどれだけ尊いものか存ぜずにしたことと見えます。唯今では厨で僧共の食器を洗はせてをります。」

(傍点筆者)

傍点部にみるごとく、道翹が、拾得の来歴や行跡について伝聞や推定で語っていることから、厨の片隅の存在である拾得に対する道翹の理解や認識のうすいことが窺われるのである。

しかも、供物に手を出したと言わぬばかりの道翹の視線は、拾得を賤視のまなざしで捉えている。

ところで、この供物を拾得が食べてしまったエピソードに相当する部分を原拠では次のように記している。

忽於二日、與_レ像對坐、佛盤同餐。

(下巻 「拾得録」)

(忽ち、一日像と対座して、仏盤に同餐す。)

右によると、〈同餐〉即ち共に食事をするとあるように、ここでは〈佛盤〉即ち賓頭盧尊者の像と拾得とは対等(いや厳密には普賢菩薩である拾得の方が上位の筈であるが)なのであり、共に食事をして何の不思議もこだわりもないことであるのだ。

従つて、長年寺に居て、拾得の眞の姿を見抜くことのできな
い道翹は、未だ悟道に至らざる人ということになるう。

だから、作品末尾において、彼が〈眞蒼な顔をして立ち竦ん
でゐた〉のは、寺内の者が客に対して非礼に及んだことに対す
る狼狽なのではなく、認識の訂正を強いられた者のおののきで
あるのだ。

かくして、世界を震撼させた大哄笑は閻一人に浴びせられた
ものではなかった。瞬時にして暗転した舞台に閻と道翹はとり
残されたのであった。

五

前述のごとく、道翹のような僧籍の人も、隠士の嘲笑を免れ
るものではなかった。

では、最後に、寒山によって直接名指しされた豊干について
はどのように考えるべきであろうか。

まず、豊干自身の風体であるが、〈垢つき弊れた法衣を着て、
長く伸びた髪を、眉の上で切つて〉おり、大男と小男の違いは
あるものの、〈髪の二三寸伸びた頭を剃き出し〉にして、〈瘦せ
て身すほらしい〉寒山拾得の異形にどこか通うところがある。

また、彼はかつて国清寺にいた時、〈僧共の食べる米を舂〉
いて地道な台所仕事に専念し、その勞に対して道翹らがあつく

遇したとたん、〈或る日ふいと出て行つてしまつたとあるの
だから、寺での行跡や素行についてもかなり寒山や拾得に近い
存在であるように見える。

ところで、小説におけるこのようにいささか謎めいた豊干は、
原拠に比べてかなり積極的に行脚の途上閻丘胤に近付いたこと
になっている。

因に原拠では、閻丘が豊干に〈遇〉うと表現されており、そ
の前後の原文を左に挙げてみる。

臨_レ途之日乃_ニ繁_ニ頭痛。遂_ニ召_ニ日者醫_ニ治、轉重。乃_ニ遇_ニ一禪
師。名_ニ豊干。言_ニ從_ニ天台國清寺_ニ來、特此相訪乃_ニ命救_レ疾。

(上卷 「三隱詩集序闡提起聞」)

(途に臨むの日、乃ち頭痛に繁はる。遂に日者と医とを召
して治するに、^{うつた}転重し。乃ち一禪師に遇う。名は豊干と
云う。言う、天台國清寺より来りて、特に此に相訪ね、乃
ち命じて病を救わん、と。)

これに依れば、任地に立出する日に頭痛にとりつかれた閻丘
が、たまたま天台の國清寺より来た禪僧豊干に出会い、病を
救ってくれるよう頼んだとある。

一方、小説の方では、豊干の方から（御主人にお目に掛かりたい）と申し出、（あなたは台州へお出なさることにおなりなすつたさうでございますね。それに頭痛に悩んでお出なさると申すことでございます。わたくしはそれを直して進ぜようと思つて参りました。）と訪問の意図をはつきり告げて、積極的に閨に近付いている。

このような豊干の行動について、古田島洋介は次のような解釈を示している。

即ち、「地方長官の威勢の大きいことを味つて意氣揚々としてゐる」閨の「嬌慢を折伏する」ように仕組）み、（寒山・拾得の正体を閨に教え、閨が二人を拜するようにしむけている）との理解である。

たしかに、このようにみると、閨の言う（逢ひに往つて爲めになる）が、別の意味で閨にとつてまさに（爲めになる）ことになるわけで、小説前半の仕掛けが、末尾の哄笑を用意したとみることができよう。

このような理解の上にたつならば、豊干はあくまで寒山拾得の側に身を置く存在ということになる。

しかし、この考え方は合理的のようにみえるが、それでは末尾の（豊干がしやべつたな）という寒山の一言が理解できなくなる。いや、末尾のこの言葉の必然性が失われてしまうと

た方がよいかも知れない。

仮りに、譲つて、（逃げしなに寒山が「豊干がしやべつたな」と云つたのが聞えた。）（傍点筆者）とあるところから、仲間うちに対する寒山の軽い符牒のようなニュアンスの言葉として理解し、特に豊干に対する批難としない、と考へてみることも可能かも知れない。

しかし、小説にあつて、本来寡黙な寒山拾得であつてみれば、彼らが唯一発した言葉がこの一言であるのだから、哄笑の意味とともに、この一言の意味は重いのである。

かえつて、睨めつけるような凄味のある決めつけ方で、豊干批難の一矢を報いたとみるべきではなからうか。

要するに豊干の他言は、寒山拾得にとつて、おせっかいで迷惑なことであつたのだ。

豊干の長安における積極的折伏は、古田島洋介の言う、閨の嬌慢を正すための（伏線）であるというよりも、世に顕れることを嫌う隠士との対比において成り立ち、架構されたものではなかつたのか。

そう考えることではじめて、前半豊干の積極性と、後半（豊干がしやべつたな）という一言との整合が可能になるのである。仏性は本来心のなかにあるもので、人に聞いたり求めたりするものではなく、またそれを人に教えたり他言することがあつ

てはならない——閻の如き俗人がこの戒を犯すことはありがたいなことであつても、修業者たる豊干までもが——というのが、寒山拾得の側の道理であろう。

もともと原拠には、次のように寒山の寡黙なありさまが伝えられている。

状如貧子、形貌枯悴、一言一話、理合其意、沈而思之、
隠況道情。凡所啓言、洞該玄默。

(上卷 「三隠詩集序闡提記聞」)

(状は貧子の如く、形貌は枯悴せり。一言一話、理、その意に合う。沈くして之を思わば、隠に道の情に況う。凡そ言を啓く所、玄黙を洞該す。)

右に依れば、寒山は見たところ、瘦せおとろえ貧子の如くであるが、ひとたび語ればその言葉には気迫が籠もり、意味するところは理に適っていたとあり、静謐で隠れているさまは道の本當の(情)にたとえられようし、又その発言そのものが玄妙であつた、とある。

つまり、語る時には説得力をもつが、常は寡黙である存在、それが寒山だといふのである。

あわせて言えば、原拠の豊干も小説ほどには饒舌ではない。彼は閻丘に、師と仰ぐに足る人のことを聞かれて、小説の方は即座に寒山拾得の名を挙げるのに対し、こちらはそう易々と応じてはいないのである。

未審彼地。當下有何賢堪爲師仰上。師曰、見之不識、
識之不見。若欲見之、不得取相乃可見之。

(上卷 「三隠詩集序闡提記聞」)

(未だ彼の地に審らかならず。まさに何の賢有りてか師として仰ぐに堪るべき、と。師曰く、これを見るも識らず、これを識るも見ず。もしこれを見んと欲すれば相を取るを得ざれ、乃ちこれを見るべしと。)

右に依れば、賢者には会おうとしても解らない、解ろうとしても会えない、もし会うとしてもその姿を見ることはできない、しかる後にはじめて会えるのである、というまさに禅問答の如き前置きのあつた後、豊干はようやく閻丘に寒山拾得の存在をあかすのである。

このように、原拠の豊干は禅僧の面目を保って抑制的である。にもかかわらず、最後には寒山拾得に(豊干饒舌饒舌)と難じ

られたのである。原拠はみだりの振るまいや饒舌に対して寛容ではない。

このような原拠の抑制的な豊干像を、小説は、〈群生を福利し、憍慢を折伏する〉、より能弁で行動的な行脚僧につくりかえて、カリスマ的存在であるよう印象付けておき、最後に寒山の一言によつて、その真の姿が顕にされる、そのような趣向をもつものと考えられるのである。

そもそも、小説における豊干は、閻のイリュージョンの中に捉えられた姿なのであった。豊干ははじめから閻の〈盲目の尊敬〉を捧げる対象だったのであり、幻想の聖者像そのものをよく代弁していた。

だから、道翹から聞かされた豊干伝説も、充分に閻の幻想を保証するに足るものであったのである。

「全く不思議な事でした。或る日山から虎に騎つて（豊干が）歸つて參られたのでございます。そして其儘廊下へ這入つて、虎の背で詩を吟じて歩かれました。一體詩を吟ずることの好きな人で、裏の僧院でも、夜になると詩を吟ぜられました。」

騎虎姿の豊干はかくして伝説化され、閻によつて〈活きた阿

羅漢〉とまでもちあげられることになる。

ともかく、豊干はすでに閻丘胤のみならず、国清寺の寺僧の間でも伝説化され、その実体は、閻は言うに及ばず、道翹にすら見えてはいない。

豊干の実体は、小説末尾、〈豊干がしゃべつたな〉という寒山の一喝によつて顕になる。

豊干は、寒山拾得の真の姿を知る修業者でありながら、なお饒舌の一点において難ぜられたのである。

寒山拾得の大哄笑は、閻丘胤や道翹を射貫くものであったが、同時に、今はもはや国清寺をはるか離れてしまった豊干の存在をも相対化させずにはおかない迫力に満ちたものであったと解されるのである。

結

入矢義高「寒山・解説」によると、寒山詩の特色のひとつに、〈在俗の居士としての立場から、職業的なエセ坊主を批判したもの〉が多くあり、しかも、〈この批判はなかなか痛烈であり、そして執拗なほどに幾度となく繰り返かえされている。〉とある。¹¹ おそらく、白隠注の「寒山詩闡提記聞」を熟読したのであろう。鷗外が、寒山詩そのものの持つこのような宗教人批判を意識して、道翹や豊干のイメージを造形したのであることは想像に難

くない。

しかし、だからと言って、閻丘胤への揶揄にとどまるこの小説に、官僚批判の名が働かなかったのと同様、ここに既存の仏教や僧侶に対する正面きつての批判をみることも、正鵠を得ないことであることは言うまでもない。

すでに見てきたように、主人公閻丘胤は、官僚として批難されるべき強烈なアクを備えた人物ではなく、無頓着にも精進にも徹しきれずに生きるニュートラルな人間の貧しさを示すにとどまった。

また、道翹は、寺という体系のなかに組み込まれた凡庸な寺僧を代表し、更に、寺の外に修業の場を求めた豊干も、俗人の関わりにおいて、饒舌という一点の難を露呈させるに至った。そこに異形の寒山と捨得を配し、彼ら隠れていたものたちが俄に顕現し、聖俗の別なく前者を一蹴すること、即ち小説末尾において世界の反転する構図が示されること——それこそがこの小説の眼目であったと考えられるのである。

閻や道翹、豊干らに付託された、予見や憶測、盲信、饒舌等、なべて人の世の浮薄なものが、人の世の住人ならぬ存在によって、きれいさっぱりと斥けられたこと、その潔さにすべてが収斂される物語であるのだ。

* * * * *

「寒山捨得縁起」のなかで、子供に寒山捨得のことを訊ねられた鷗外が答に窮して、(「實はパパアも文殊なのだが、まだ誰も拜みに来ないのだよ。」と語るところがある。

この言葉などは、鷗外の身辺の事情とからめて多様な解釈が可能であろうが、小説に即して言えば、まさに「鷗外饒舌」なのである。子供への弁を装いながら、自己の「真の姿」を言挙げしておいて、逆に自己の至らなさを暴露してみせる振れた趣向かと疑いたくもなるところではある。

いずれにせよ、文殊に自己を仮託させる不遜をあえておかししたのは、傍観者鷗外の醒めた知性であったことは言うまでもない。

注

- 1 唐木順三 「鷗外の精神」 筑摩書房 昭18・9
- 2 岡崎義恵 「鷗外の『寒山捨得』」 『文芸研究』 昭24・7
- 3 吉野俊彦 「官僚制の嘲笑と求道者へのあこがれ——『寒山捨得』」 『権威への反抗 森鷗外』 PHP研究所 昭54・8
- 4 小泉浩一郎 「寒山捨得」 『森鷗外論実証と批評』 明治書院 昭56・9
- 5 古田島洋介 「寒山捨得新注」 『比較文学研究42』 東大比較文学会 昭57・11・20

- 6 注4に同じ
- 7 注5に同じ
- 8 三島由紀夫 「鷗外の短篇小説」 『文芸増刊・森鷗外読本』
昭31・7・25
- 9 景山直治 「鷗外『寒山拾得』における資料と作品の関係」
『教養論集33号』 明治大学 昭41・1
- 10 注5に同じ
- 11 入矢義高 「解説」 『寒山』 岩波書店 昭33・4

(短期大学部日本文学科教授)